

第6期の「主な取り組みと、その成果」

① 地域振興の核となる「道の駅」との連携

第5期において複合施設建設構想をスタートさせ、より具体的な構想を提言、複合施設「道の駅」が実現しました。その事業を引き継いだ第6期は、「道の駅」建設の具体的提案を行いました。

この施設は、平成29年4月運営母体となる株式会社あい風として設立、平成30年春の営業開始に向け準備が進められており、多くの住民が係り・携わり、地域振興の「核」なる施設となることを描いています。

また、一方では「ゲートウェイ」としての顔を持ち、区外から多くの集客が期待されており、その受け皿にと地域では、『滞在』『周遊観光』の具現化を目指し「厚田地域着地型観光町づくり協議会」が立ち上がり、『地域資源を活用した観光商品の開発』や『民泊』について学び、『おもてなし講座』を開催するなど、住民、地域振興団体、地域協議会とともに、具体的な動きを展開しております。

さらに、地域振興団体においては、従来の取り組みのほかに、道の駅を意識した新たな取り組みも進めてきました。

「近説遠来」に向けた新たな担い手確保のためにも、更なる地域活性化の動きを厚田区全体に広げるためにも、これまで以上に自治会との連携を密にしながら、町内会単位での活動の輪を広げていく必要があります。

② 地域おこし協力隊のあり方

平成 26 年から導入した地域おこし協力隊は、自ら企画提案し、地域に根ざした活動を実践し、退任後は区内に定住しております。また、本年5月より第2期協力隊が着任し、これまで同様、自主的に地域での活動のあり方を模索しているところです。

協力隊の持つ“新たな視点”や“感性”、“SNS”(Facebook などのソーシャル・ネットワーキング・サービスの略)を活用した情報発信は、地域活性化の大きな『戦力』となります。

今後も更なる地域活性化を目指し、合わせて厚田区内外の結びつきをより強固なものにする活動が展開できるよう、環境整備を含めた地域おこし協力隊のあり方を検討していく必要があります。

③ 地域協議会のあり方

厚田区の掲げる『近説遠来』の実現に向け、合併前の「行政主導型」から、地域協議会での検討をもとに「住民と行政の協働」が定着し、現在も各地域振興団体において生活支援、イベント開催、環境保全、文化・体育振興、厚田の魅力発信などの実践を継続しています。

第7期協議会では、さらに「住民主体」の地域を推進すべく、住民の想いや意見を集約し、地域協議会における情報を地域にくまなく伝わるよう発信し、多くの住民が地域づくりに参加しやすい環境・仕組みを具体化する取り組みを重ねていくことが必要です。

また、現在のところ地域自治区の設置期限については、平成 33 年 3 月までとなっており、将来の厚田のあり方、方向性について自治会をはじめとする地域振興団体・企業を巻き込んだ、地域全体の意見集約が第7期協議会における役割の一つとなります。

④「厚田カンパニー構想」の方向性と地域協の見解

いつまでも、いくつになっても住みなれた厚田に住み続けたい、そのためには困りごとがあった時にいつでも相談できるところが身近に必要です。「厚田カンパニー構想」は、身近な困りごとの解決と住民活動の拠点づくりを目指しており、そのためには住民主体で、自治会、地域振興団体が中心となり、行政との協働で創り上げていくことが必須となります。

「できることを」「できる人が」「できるときに」、地域住民が主体となって創り上げる「厚田カンパニー」は、「近説遠来」における「近説」であり、「遠来」の「道の駅」と合わせて地域自治区振興の車の両輪となります。

この「厚田カンパニー」構想は、地域協議会の今後の在り方とも大きく関係する重要なテーマでもあり、厚田区の将来を左右する重要な課題です。

本格運営までに住民、自治会、地域協議会、支所など、地域の様々な個人や団体が係ることにより、過疎地における「近説遠来」のモデル事業としても期待されます。